

相生っ子

○本年度の相生教職員のため
一児童が主役の学校づくりと
ICT活用による学びの充実



令和3年9月6日 相生小学校 校長室だより 第17号 文責：岩佐隆之

ご心配をおかけしたノロウイルスの感染は、収まっています。罹患された皆様には、お見舞い申し上げます。相生っ子は、外で遊べない昼休みが続いていますが、友達やスマイル班の仲間、先生方と仲良く過ごしてしています。気温が下がってきたので、思う存分、外で体を動かせるようになればと、心待ちにしています。5・6年生は、郡陸上運動記録会に向けての、朝や放課後の練習が始まりました。

昨日、閉幕したパラリンピック東京2020。およそ160の国と地域から集まった4000人を超える選手たちが、自らの限界に挑んでいます。今回の「校長室だより」は、NHKで放映された「TOKYOカラフルワールド・香取慎吾のパラリンピック教室」からお伝えします。6日（月）のZoom朝会でも、相生っ子に話しました。



パラリンピックが掲げる大きな目標とは？

パラリンピックには勝ち負けだけでなく大切なメッセージがあります。それは「人々が互いの違いを知り、認め合うこと」です。この考え方はスポーツの枠を超え、社会を変える可能性を秘めています。



<陸上 走り幅跳び マルクス・レーム選手>

「私の仕事は最高の状態で競技をすること。そして障がい者だけでなく健常者にも、パラリンピアンが何を成し遂げられるかを見せること。特に子どもたちに『頑張り続ければ、障がいのない人を上回ることすらできる』というメッセージを伝えたいです。これまで、平等ではないことがたくさんありました。例えばオリンピックとパラリンピックのアスリートへのサポートのしかたです。人々を区分けするのは正しくありません。いつの日か、互いに近づけることを願っています。これはよりよい社会をつくるためのチャンスなんです。」実は、レーム選手はパラリンピックではなく、オリンピックへの出場も求めています。障がい者と健常者の壁をなくし、同じ舞台で活躍すること。それが、レーム選手が目指している世界なのです。

マセソン美季さん。1998年、長野冬季パラリンピックで金メダルを獲得。現在はパラリンピック教育の第一人者として、子どもたちに大切なメッセージを伝えています。



「パラリンピックの目標は『**インクルーシブ**』な社会をつくることです。『インクルーシブ』というのは、**すべてを包み込むとか、それぞれの違いを認めて、みんなが自分の居場所を見つけて活躍できると**

(裏面もご覧ください。)

か、そんな社会のことです。」「選手たちが活躍をすることで、障がいのある人たちに興味や関心をもって、社会が少しずつよくなっていく動きがあっても、それだけで終わらせてはいけないと思っています。パラリンピックが行なわれたことで社会が住みやすくなった、周りの人たちの意識も変わってきたと、気がついて初めてパラリンピックは成功だと思っています。」



<都内に住む安部井聖子さん>

次女の希和子(きわこ)さんは、寝たきりで生活を送っています。聖子さんは希和子さんの介護を30年以上続けてきました。「こういう本当に障がいの重い人

たちは、競技にすら参加することができない」と聖子さん。さまざまな障がいの理解につながるはずのパラリンピック。しかし、スター選手には注目が集まっても、希和子さんのような存在には、まだ目が向けられていないと感じます。「娘を同じように理解してもらえるか。うちにはこんな重い障がいの子どもがいるのに、同じ障がい者の中に入れてもらえているのかな。」(聖子さん)

こうした思いは、IPC 国際パラリンピック委員会も向き合うべき課題だと考えています。

<IPC 国際パラリンピック委員会 アンドリュー・パーソンズ会長>

「パラリンピックを通じた障がい者への理解は、まだ不十分だと思います。やるべきことはたくさんあるのです。スポーツを通じて誰もが共に暮らせるよりよい社会をつくる手助けになること。パラリンピックは、その原点に戻る時が来ているんです。」IPCは、東京大会を前に新たなキャンペーンを始めました。主役はアスリートではなく、身近にいる障がいがある人たち。それぞれが個性豊かな異なる存在であることを伝えようとしています。



<1歳で水泳を始め、周りの子どもたちよりずっと速く泳げたという一ノ瀬メイさん>

9歳のとき本格的に練習しようと日本のスイミングスクールを訪ねた時、返ってきた言葉は、「障がい者の方は入会できません。」ところが、その後移り住んだイギリスでは、すぐに入会が許可され、ほかの子どもたちと一緒に泳ぐことができました。右腕が短いこと以外は変わらないのに、泳ぐことを拒まれたり、許されたり。「障がい」って何だろう。一ノ瀬さんがたどった答え。それは…「障がいはその人の体にあるのではなく、社会が作りだしているもの。」例えば、車いすの人がいます。この人が「足を動かせない」ということが障がいではなく、車いすで乗り物に乗れない、お店に入れないなど周りの環境が作り出している壁が障がい。つまり障がいは社会が作り出しているものだと言ったのです。私も、「障がいがあるから苦しいのではありません。差別があるから苦しいのです。」と直接、伺った言葉を大切に、ことあるごとに子どもたちに話しています。<次号に続きます>



(裏面もご覧ください。)